

絶対者の構成

石 崎 宏 平

1804年、Fichteは3回にわたる「知識学」についての連続講義を行っている。今ここではこの中の第2回の講義^①を手がかりとして彼の「知識学」の主張の本質を明らかにしよう。Fichteはこの講義の予告の中で、自分がこれまで多年にわたって行ってきた研究の成果が確実に理解されるためには、このような口述講義と、対話の形をとる以外にないと述べている。また同年3月31日のJacobi宛の手紙では、現代を「あらゆる理念の絶対的不在の時代」^②とし、この様な時代に於ては「知識学」を印刷に付するのではなく、ただこれをそのまま引き受ける勇気をもつ人々に口頭でのみ伝えるであろう、と述べている。それによって我々は「知識学」が、以後公にされない理由の一端を知ることが出来る。「知識学」についての多くの誤解や批難を取り除くためには、知識学の理解のための忍耐と勇気を持つ人々にだけ口述講義という方法しかないと考えたのであろう。しかもその考え方は最後まで変わっていない。

それではいったいこの1804年の「知識学」は何を問題とするのであろうか。

1. 知識学の課題

Fichteの問題はあくまでも「知識学」である。知識学は可能な哲学体系の一つである。そうだとすればその哲学とは何か。哲学は真理を表現することにある。その場合真理とは「あらゆる多様なものを絶対的統一へ還元すること」(7)である。それゆえ、哲学はこの絶対的統一の追求にある。しかしこの統一は、多様の統一であり、従ってその統一は対立物を純粋に自らの中に含んだ真なるもの、不変的なものである。それは真に完結した絶対的なものを意味する。従って哲学の課題は「絶対者の表現 *Darstellung des Absoluten*」(8)である。

しかしこの絶対的統一、或は絶対者を我々はいかなる立場で追求するのであるか。Kantにいたるまでのあらゆる哲学は、明らかに、「絶対者は存在の中に、死せる Ding の中に、Ding として定立されている。物は自体であらねばならぬ」(10)と考えられていた。しかし Fichte によれば絶対的統一は、存在の中

にも、存在に対する意識の中にもなく、また物の中にも、物の表象の中にも定立されるのではなく、両者の絶対的統一と不可分性の原理の中に定立されるのである。そしてこの原理を Fichte は純粋な知 *reines Wissen*、或は *Wissen an sich* と名付ける。この様な純粋な知に於て絶対者を定立する。

Kant も絶対者を存在と思惟の *Band* として理解した。しかし彼は真に一つなる絶対者をその絶対的独立性に於て理解したのではなく、それを三つの絶対者の共通の根本規定、属性としてしまっている。ここに知識学が Kant 哲学と異なる点がある。知識学の主張は、「知、或は確信が、実際に一つの純粋なそれ自身で存立する実体である」(23)ということにある。しかしこの実体は物體的なものとして考えられるべきではなく、活動性の概念として理解されるべきものである。

ところでこの知は、対象のあらゆる変化にもかかわらず、従って対象の完全な捨象に於てもなお存続するものとして、即ち実体的に常に同一に止まるもの、従って質的にそれ自身徹底的に不変的な統一体として会得された。そのことによって我々は知識学の中に浸った様に見える。しかし Fichte によればそれはそう見えるだけであってそれは空虚な仮象にすぎない。我々が洞察したのはその統一体がただそのようにあること (*Daß*)、のみであって、その絶対的統一が質的統一として何であるか (*Was*)、を洞察したのではない。知識学はその統一の中に何があるかを洞察しなければならない。そのためにはこの知の本質を内的に構成しなければならないと Fichte は言う。そのことは同時に知の自己自らによる構成を意味する。「知のこの構成に於て、知は疑いもなく存在し、それがあるところのものが存在的としてあり、存在的なものとして、それがあるところのものである。従って知識学と、その本質的統一に於て自己自身を表明する知とは、完全に同じである」(24)。知識学はその根源的本質的な知に於て、また根源的本質的な知は、知識学に於て、相互に一心同体で、浸透し、それ自身では全く区別されない。

それではこの根源的知はいかなる性格をもつのであろうか。それは根源的本質的知が構成的であるということの意味する。それは別な表現をすれば *faktisch* でなく *genetisch* であるということである。これを Fichte はまた *Evidenz an sich* とも呼んでいる。Kant は絶対的統一を絶対的実体とみなしているが、そのような実体は事實的客観としてそれ自身に於ては統一体ではなく、二性 *Zweiheit* として把握されているにすぎない。この様な統一の事実性をその *Genesis* の相に於て明らかにするのが Fichte の立場である。言わば絶

対的統一の Genesis、或は絶対者をその Genesis に於て、Evidenz に於て構成することにある。

知識学は知の内面的な質的な不変な存在を構成しなければならないと言ったが、そのことによってまた変化も同様に構成されるという。「この構成、即ち不変なものの変化するものとの二重の構成の本来の意味は、我々がこの構成を実際直接に遂行したときにはじめて完全に明らかにされる」(32)

それではこの構成の直接的遂行はいかにして為されるか。

2. 統一の Ungbegrifflichkeit とその Begreifen

知識学は絶対的統一を把握しそれを直接構成しなければならなかった。しかしこの統一はその直接性に於ては表明されもしなければ、また追構成 (Nachconstruction) されることも出来ない。何故なら、すべての表明、或は追構成、または概念把握は、それ自身に於て間接的な把握にすぎないからである。Fichte の求めている絶対的統一は単なる統一ではなくそれ自身の中に分離を含んだ直接的統一である。「知識学の総合的洞察に於ては、分離は、正に統一と同様、絶対的でなければならない。しかし統一にとどまっているならば我々は変化に出て行くことは出来ない」(34)。Fichte に於ては統一の原理は分離の原理と不可分であり、しかもその総合的統一は両者を一挙に産出する総合統一である。従ってそのような統一はまた「内的有機的統一 die innere organische Einheit」(35)とも呼ばれる。この有機的統一が構成されねばならない。構成は概念による把握 Begreifen である。しかしそれはまだ根源的構成ではなく追構成 Nachconstruction である。この追構成はそれ自身に於ては間接的である。そうだとすれば有機的統一はそれ自身に於ては構成されない。にもかかわらず知識学はこの統一を要求する。そうだとすればその構成は、構成されないものの構成、把握し得ないものの把握、としてある他ない。有機的統一は概念性から見られた場合把握されないのである。しかし概念の否定によって把握されないものが把握されないものとして把握されるのである。かくして有機的統一の構成にとっては、あくまでも概念の定立と、その否定を通してはじめて、概念的に把握されないものとして把握されるのである。この把握されないものとして現われるものが今や「絶対者に関して純粹な対自的に存立するもの、実体性 Substantialität として残る」(37)のである。しかし「絶対者はそれ自身としては把握できないのではない。絶対者が unbegrifflich であるのは概念が絶対者に挑戦しようとする時だけである。そしてこの Unbegrifflichkeit がその唯

一の性質である」(37)。

それではこの把握できないものとして把握されるものが今や絶対性として「それ自身にとって純粋に存立するものとして明確に限定されるべきである」(38)のである。

3. 光の内在と発出

純粋な存立は概念の否定によって成立するとすればそれはもはや概念から由来することは出来ない。概念の否定によって把握出来ないものが把握できないものとして把握されるのは、その把握できないものとして、それ自身存在するものとして照らし出す *einleuchten* ということである。即ちそれは先の実体性が直接的明証に於てのみ直覚 *Intuition* に現われるということである。

さて照らし出すものは光である。光によって一切が明らかになる。光自身が自己自身によって明らかとなる。

ところで概念の否定は概念が有機的統一を適切に把握し得ないということの洞察から生じたのであった。この洞察が明らかになった。我々はこの明らかとなること *Einleuchten* の制約を、即ち概念の定立と否定を創造する。しかし概念は自己を絶対性に関して否定するということ、我々がやるのではない、我々に光が現われるのである。明らかにすることとは直接的な洞察作用である。それは概念の反対物に於て成立する。しかしこの把握によって我々はこの光の中に直接に没入し同化されるのではなく、「我々は光を、光についての洞察の代表者及び代理人 *Stellvertreter und Repräsentanten* の中に持つ」(39)のである。それは光を外へ代表する。それは光を発出する。しかし自己自身に対しては光は内在的である。ここに光の二つの存在の仕方が示される。*Fichte* は光の内在 (*Immanenz*) と光の発出 (*Emanenz*)、その関係の分析を通して光そのものの性格、さらには絶対者のあり方を明らかにしようとする。

Immanenz として光は直接的な明らかにすること *Erleuchten* であり、我々はそこに於て現れるのである。*Emanenz* としての光は、光の外的实在形式として客観化された光である。内在的光は照らすこととしてその実体性はただ光の形式にすぎず、その本質は生きた活動性である。

Fichte は光の *Immanenz* と *Emanenz* の関係を模像 *Abgebildetes* と像 *Bild* の関係によって説明する。模像は像を要求し、像は模像を要求する。模像なき像、は無である。即ち像はそのものとしてはすでに本性上、それ自身に於て何等独立性を持たず、自己の外なる根源的なものを指示するのである。模

像も像なしには考えられない。光の Immanenz と Emanenz もこれと同様である。最高の統一原理は両者の統一、即ち模像と像の統一、Immanenz と Emanenz の統一に於てある。これが光の genetisch な考察の中にある原理である。

光の内在と発出の関係の具体的分析を Fichte はまず光の発出から行う。しかし一方は他方なしにあり得ないとすれば、光はその客観化によって、客観化はかの光によって把握されるということが理解されねばならない。両者が相互に把握されねばならない。その場合その把握はまた両者の相互浸透 *Durcheinander* である。即ち上述の比喩に従えば、一方模像は像によって把握され、他方像は模像によって把握される。我々が概念が実行するものを把握するならば、我々にとって概念は分析的に分離すべきものの統一を実行することであり、この実行が *Durcheinander* として表現される。Fichte はこれを実体化する。*Durcheinander* に於て、概念的分離と照らす光は一体をなし、光と概念は相互貫通 *Durcheinander* として把握される。ここに分析と総合の genetisch な合一点が成立する。それは「光の概念よりもより高次の概念として *Urbegriff* 根源概念」(69)と呼ばれる。

次に Fichte は光の内在の考察に進む。すでに述べたように、光は自ら照らすものである。光の分離は光の *Emanenz* に属する。しかし光はそれ自身として考えられた場合、通常光そのものであり、照らすことであり、それを Fichte はまた「自分で、自分から、自分によってあらゆる分裂なしに、純粹な統一における光そのものの内的な生 *Das inwendige Leben des Lichtes selber, von sich, aus sich, durch sich, ohne alle Spaltung, in reiner Einheit*」(80)と規定する。この光の生はより適切には「生きた光 *das lebendige Licht*」(76)である。この生きた光の中に定立されるものが神である。「従って本来、絶対者はただ光のみである」(75)。

しかし我々はこの内在的な光をいかにして把握し、知ることが出来るであろうか。「光の内的生は全く把握されない」(79)。この把握できない実質的な光を与えるのは概念の否定によるのである。それによって内在的光は一方では発出的光における分裂の可能性の制約として、他方では概念的分裂に、一般にすべての概念性に関係なく残るところの統一として考えられねばならない。それ故一般に存在と思惟の分裂の可能性が内在的光の中にあり、他方で、内在的光が概念に先立つ統一として考えられるべきであるとすれば、すべてのその実在性は内在的光の中にあると言われねばならない。存在と思惟、主観と客観における分裂は、あらゆる実在性を包括する、考えられうる最高の分裂である。それ故

内在的光は Janke の言うように「不可分の統一における最高の実在性 *Omni-tudo realitatis in ungeteilten Einheit*」^⑧であると言うことが出来るであろう。この最高の実在性を Fichte は神の概念の公式化の一つと考えている。それは根源的な光の、照らすことの中にある。この照らすことそのことが、それについての洞察を捨象した時、そこに残るもの、それがこの実在性である。しかし洞察は厳密には捨象されるのではなく、洞察がその限界を洞見するにすぎない。

それではこの実在性と根源概念、それは Fichte ではまた光と概念として示されるが、この両者の関係はいかにあるか。Fichte ではこれまで両者はいずれも絶対者と考えられて来た。彼が言うように「我々はこれまで、我々に何よりも最も直接的なるものとして現れたもの、そして我々が交互に絶対者として定立したもの、即ち光と概念に固執している。そしてこれに関して我々は両者のいずれが正当な真の絶対者であるか決心がつかない」^⑨。その限りまだ両者の統一は見出されてはいない。両者から出発しながらしかも本質上より高次の、両者の区別原理と統一原理がなければならない。そうするとこれまで絶対的と考えられていた両者は、その絶対性を失い相対的とならざるを得ない。そこで両者の高次の統一が構成されねばならない。光と概念の生きた統一の *genetisch* な構成が今や課題である。

この課題を解くために Fichte は再び光の内在と発出を手がかりとする。

光は二重の関係の中に生ずる。即ち「一方で内的にそれ自身の中に生きたものとして、そしてこの自らの内的生によって、それは概念と存在に分かれるべきである。他方でそれは一つの外的な、自由に産出された、そして光を、その内的生とともに客観化する洞察に於て生ずる」(94~95) ののである。Fichte は光の内在的生から出発し、それが洞察の否定によって絶対⁰に到達できないものとして *negativ* に理解されるに至ると考える。この理解は勿論一つの概念的把握である。しかしそれは我々がそれをまた把握するのではなく「我々がそれを持ち、また我々がそれである *wir haben es, und sind es*」^⑩ そういうものとしてあるのである。ここでは光は概念作用の否定として概念作用の彼方に 0, Null としてある。しかしそれは無を意味するものではない。それは一種の無限定性と考えられる。今や Fichte は概念の側からその関係を明らかにしようとする。

概念は諸々の関係を定立する立場であった。それは以前に於ては *Durcheinander* として規定された。しかしここでは Fichte はさらにそれを *Durch* として規定する。「若し光が内在的⁰光の発出に至るべきならば、それはただ一つ

の絶対的に実存する Durch に於てのみ可能である」(104)。しかし我々はこの Durch を遂行する。そうすればこの Durch は生きる。それは必然的に結合している。若し我々が Durch は生 Leben を前提するということを反省するならば、我々は Durch を生によって説明することになる。そこで「Durch の実存 Existenz は、根源的な、具体的には決して Durch の中にはなく、全く自己自身の中に根拠づけられた生 Leben を前提する」(106)。すべてのものの中心にあるのは概念である。「概念は一つの生きた Durch を構成する。このことは勿論蓋然的 problematisch である。このことがあるべき Soll ならば、そこから生の実存が生ずる」(107)のである。このように Durch はそれ自身の中に自己を遂行する生き生きとした Energie を含んでいる。

この様な Durch を介して今や絶対者に対する二つの見解が明らかにされる。

4. 実在論と観念論

先にあげた Soll は概念の独立性の直接的表現である。従って「一つの Durch の実存はここでは全く絶対的で apriori なものとして現われる。この概念は Durch の実存の蓋然的被定立態に対する絶対的優位である。…そしてこれによって概念としての概念は自らを絶対的な内的 Durch として示す」(108)。そしてこの絶対的な概念の実在性を主張する立場が観念論の見解である。

これに対して「Durch が実存に至るべきならば、絶対的な自己自身に根拠を有する生が前提される。従って生が真の絶対者であり、一切の存在は内的にその中に殞入する。それによって明らかに直覚そのものが否定される」(110)。これが実在論の見解である。Fichte はこの二つの見解をいずれも否定する。

この二つの見解は相互に対立する。観念論の見解は、意識を根源的事実として前提する。この見解は「根源に於て事実的であった。何か自己の外なる或る他のものへの関係に於てではなく、自己自身への関係に於てある」(111)。意識は常に自己自身を前提し、従って自己自身にとって事実である。これに対し実在論の見解は、思惟の事実を完全に捨象し、専らその単なる内容のみを妥当な、絶対的に真なるものとして前提する (107~8)。しかし「この内容における依存は、自身一つの絶対的事実である」(ebenda)。

このように観念論の見解も実在論の見解もいずれも事実性を前提としている。Fichte の立場は事実性の立場ではなく Genesis の立場であるとすれば、両見解はいずれも真の知識学の立場となり得ない。知識学は、事実性を Genesis にもたらすことにある。それはより高次の立場として現われねばならぬ。

Fichte は高次の立場を實在論の分析を通して明らかにする。「實在論そのものから實在論に対して争わせねばならない。即ち實在論自身を自らと矛盾の中に出会わせねばならない。實在論に於て分離を引き起こすような矛盾によって。その事實的原理が genetisch になり、この Genesis に於て恐らく高次の觀念論と高次の實在論の原理さえも一つになるであろう」(121)と考えている。

それではこの生成化はいかにして實現されるのであろうか。Fichte はそれを生の自体 *Ansich* の考察をもってはじめる。

實在論は *Ansich* から、*Ansich* 以外の一切のものを否定する。それでは實在論はいかにして *Ansich* を成立せしめるのであろうか。

我々は *Ansich* を精力的に思惟しつつこれを反省構成する。しかし *Ansich* は、それが構成されたもの、あらゆる構成作用及び一切の構成可能性の徹底的な否定を意味するということに他ならない。そうだとすれば「*Ansich* は、ただ思惟を否定するものとして記述さるべきである」(121~2)ということである。この *Ansich* についての思惟の否定は Fichte によれば、直接的に明らかになる。「それを人は直覚 *Intuition* と名づける」(121)。そしてこの絶対的 *Ansich* があるが故にこれは絶対的直覚である。「従って絶対的直覚の投映 *Projektum* は否定であり、絶対的 *Nichts* であるだろう」(121)。このように否定は直覚されたのであり、*Ansich* は思惟されたのである。*Ansich* がこの様なものとして考えられるとすれば *Ansich* を根拠とする實在論の立場は実は觀念論の立場に他ならない。

Fichte はなお高次の觀念論と高次の實在論を詳細に分析、吟味していく。その過程はこれまでの様に重層的である。一つの問題が解決されたかに見える、次の問題が提出される。この様な思索を跡づけるためには、文字通り強靱な思索力と忍耐力と勇気が要求される。我々は今その細部に立ち入ることなく結論を急ごう。

高次の觀念論も高次の實在論も結局は我々の課題を解決することが出来ないとすれば、我々は究極的に絶対的統一、絶対者をいかに構成することが出来るのであろうか。それは實在論の放棄を介する以外にない。具体的には實在論の中に含まれている欠陥、即ち「否定としての、その関係の項としてのその *Ansich*」(121)を放棄する以外にない。この *Ansich* を放棄した後に残るものは何であるか。「精神的に絶対的であるものとして受け取られた *das Sein und Bestehen und Beruhen* が残る」(121)。さらにそれは「一つの非自体 *Nichtansich* を指示する根源的な *Ansich* に関してまた現われるところの絶対的關係の放棄によ

て残るのは、一つの純粹な単なる存在、das reine bloße Sein のみである」(51)。この様な存在はいかにして構成されるか。Fichte は更なる構成へ向かう。それは意識の捨象に基づく。そうした場合その存在は「全く自己自身で、自己自身に於て、自己自身によってある Es ist durchaus von sich, in sich, durch sich,」。(51)これはスコラ的に表現するならば「一つの作用的存在及び更に一つの純粹な作用における存在 ein esse in mero actu である」(ebenda)。そこに於ては存在と生とは全く交互に浸透し相互に没入している。それはもはや他の何物をも必要とせず、それ自身に於て完結した統一的存在である。しかしそれは客観的对象的なものとして受け取られるべきものではない。そういう意味でこの存在はまた「一つの動詞的存在 ein verbales Sein」(52)と呼ばれる。かくして知識学はその目的である絶対的統一、絶対者に到達した。絶対者の genetisch な構成という知識学の課題は解決された。

しかしこれはまだ知識学の一半にすぎない。知識学は絶対的統一、絶対者の構成と同時に、またそこから多様の導出を明らかにしなければならない。それは「今まで事実的としてそれ自身で妥当しないものとして放棄した一切のものを、それでも必然的な真実な現象、notwendige und wahrhafte Erscheinung として導出しなければならない」(53)。それは絶対者の現出論として本書の第二部の課題である。

この絶対者の現出論は同時に絶対者の Dasein の問題として1806年の「知識学」と、更には1807年の「宗教論」に於て展開される問題である。この点については稿を改めて論ずるつもりである。

(いしぎき こうへい、本学教授)

注

- ① 以下の引用は J.G. Fichte: Wissenschaftslehre, Zweiter Vortrag im Jahre 1804. Hrsg. von R.Lauth u. J.Widmann (PhB. S.284) による。
- ② J.G. Fichte: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. III, 5. S.236
- ③ J.G. Fichte: Wissenschaftslehre 1804. Text und Kommentar, Hrsg. von W.-Janke, 1966 S.117